原点に立ち返る術（仮題）

出口義子

農業をしている実家の畑で里芋をもぎながら親芋を中心に子芋が外へ広がりびっしりと土に根を張る様子を眺め、当時描いた壁画のことを思い返しています。

つちのいえに参加したのは3回生の春。壁の上塗りと同時に進めたいくつかの新たなプランのうち、私は主に壁画制作に関わり、図案を提案させていただきました。先輩方の手によって美しく塗り上げられた赤い土壁を前に、緊張感を持って取り組んだことを覚えています。

図案にしたのは、つちのいえを中心に生きものが集まり同心円状に広がって行くイメージ。作業中、虫や動物に出会う度に受講生みんなで手を止めて夢中になっていた時間がアイデアのもととなりました。この先もつちのいえの周りに豊かにゆるやかに命が繋がり広がっていくように…。当時特に傾倒していた秋野不矩先生の絵に出てくるインドの砂絵や壁絵の影響もあったと思います。
人間のモチーフは、円のいちばん外側に描きました。つちのいえで活動していると様々な現象にも出会います。土壁に走るひび割れ、暑い夏が溶かす屋根、茅の穴の中に住む無数の蜂、瞬く間に緑に埋もれる丘の階段…自然にはかなわない、と肌で感じます。生きとし生けるもの、私たちを取り巻く現象を尊く思い、人間がこの世界のいちばん端っこにいることを自覚していたい、という気持ちが当時も今も変わらずあります。
月日を経て、雨風に晒され風化しながらつちのいえのある景色を見守るような存在であってほしいと思っています。

現在私は日本画の制作をしつつ、子どもに絵を描く場を提供しています。小さな子どもたちの手はまるでひとつの生きもののように自由に動き、絵筆を走らせます。つちのいえに参加し、頭からではなく手でつくることから始めれば新しいものが見えてくる、ということを経験しましたが、今また改めて子どもたちの姿からその大切さを実感させられているところです。
この世界を見つめつくる原点に立ち返る術を、この先もずっとつちのいえで過ごした時間が示してくれることと思います。

（2013年度参加　2017年大学院日本画専攻修了）

子ども向け土絵の具ワークショップの様子
(熊田悠夢さんの造形教室と出口の絵画教室が合同開催)